

related及びrelateと連語を形成する 前置詞について*

森 創 摩

1. はじめに

「関係・関連」を表す表現は、be concerned with~, be involved with~, have something/nothing/much/a lot to do with ~などに見られるように、前置詞 withと非常に結びつきやすい。しかしながら、形容詞related（この用法の relatedは一般には過去分詞形容詞と呼ばれることがあり、現代英語では形容詞とみなされ、ほぼ全ての英和辞典・英英辞典において形容詞と表記されている；以下では、誤解が生じる場合を除いてrelatedを過去分詞ではなく形容詞と呼ぶこととする）と結びつく前置詞は事情が異なるようだ。結論を先取りして言うと、形容詞relatedと結びつく前置詞は、少なくとも現在の使用上の規範としては、withではなくtoである言える（例えば、以下の(1)の例のように）。

* 本稿の執筆に際して、元日本英語英文学会会長の渋谷和郎先生と日本英語英文学会事務局の渋谷優介先生から貴重な助言をいただいた。本稿の執筆は、大西秀一氏と椎名美智氏（法政大学教授）との談話が大きなきっかけとなり、石川和佳氏、酒井啓史氏、戸鹿野友梨氏、中村直樹氏、そして横尾夏澄氏らとの楽しい英語学談義が本稿の執筆を促進させた。ここに記して彼らに感謝したい。また、菅原多嘉子氏（千葉工業大学・文京学院大学非常勤講師）に感謝申し上げます。本稿のネイティブチェックは彼女の協力に負うところが非常に大きい。さらに、本研究を長年応援し続けてくれた田中徹也氏、渡邊泰央氏、中川礼子氏、八巻辰二氏の四人に御礼申し上げます。以上の方々がいなかったら、本稿は完成しなかったかもしれない。そしてさらに、本学会の匿名査読委員のお二人に感謝の意を表す。忙しい中、査読を引き受け、貴重な査読コメントをくださり、深く感謝する次第である。なお、本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任による。

- (1) Education levels are strongly *related to* income. (LDCE⁶, s.v. related)

以下では、形容詞 *related* と連語関係をなす前置詞についての議論を行う(ここでの連語関係とは、『ジーニアス英和辞典第5版』に従い、その語と一緒によく用いられる前置詞を指し、以下では、連語(関係)という用語をこの意味で用いることとする)。また、他動詞 *relate* と連語をなす前置詞についての議論も行う¹。

2. *related to* か *related with* か

『研究社新英和中辞典第7版』、『ランダムハウス英和大辞典第2版』、『グランドセンチュリー英和辞典第4版』は、*related* と結びつく前置詞として表記上は *to* と *with* の2つを認めている²。一方、*OALD*^{2,3,4,5,6,7,8,9,10}, *LDCE*^{1,2,3,4,5,6}, *COBUILD*^{4,5,8,9}, そして *CALD*^{3,4} は、*related* と繋がる前置詞として、*to* を認めているが((1) - (3)の文例のように)、*with* は認めていない³。ちなみに、*MWALED*^{1,2} は *related to* を含んだ例文を挙げているが、*related with* を含んだ例文は記載していない。

- (2) The amount of protein you need is directly *related to* your lifestyle.

(*OALD*¹⁰, s.v. related)

- (3) Our quality of life is closely *related to* our health.

(『ウィズダム英和辞典第4版』)

実際、以下の(1') - (3')の例を本研究のインフォーマントに確かめてみたところ、(1') - (3')は容認されなかった⁴。

- (1') *Education levels are strongly *related with* income.

- (2') *The amount of protein you need is directly *related with* your lifestyle.

- (3') *Our quality of life is closely *related with* our health.

また、COCAで“*related with*”と検索したところ303件あり、以下の(4)はその一例であるが、ネイティブチェックを行ったところ、(4)の例は容

認められず、(5)は適格であるという結果になった。

- (4) They rewarded them more and criticized less. This feedback was *related with* their performance. (COCA)
- (5) They rewarded them more and criticized less. This feedback was *related to* their performance.

さらに、安藤(2011)は、以下の(6)の例を挙げているが、私が行ったネイティブチェックでは、(6)は容認されなかった。一方(7)の例は、容認された⁵。

- (6) These two facts are curiously *related with* each other. (安藤 2011: 1350)
- (7) These two facts are curiously *related to* each other.

そしてさらに、オンライン版の *Macmillan Dictionary* における *related* には、次の記述がある。

- (8) After the adjective *related*, use the preposition *to* (not ‘with’):
- × Many health problems are *related with* poor diet.
 - ✓ Many health problems are *related to* poor diet.
 - × Love, in this play, is *related with* money and social conventions.
 - ✓ Love, in this play, is *related to* money and social conventions.
- (<https://www.macmillandictionary.com>) (見出し語 *related* における Get It Right! の項目を参照)

これにより、オンライン版の *Macmillan Dictionary* は形容詞 *related* と繋がる前置詞として *to* を認めているが、*with* は認めていないと分かる。

本節では、各英英辞典を調べ、かつインフォーマントチェックを通して、形容詞 *related* と連語をなす前置詞として *with* は認められないだろうということを見た。

3. 能動形 *relate A to/with B*

前節で、*with*は形容詞 *related*と繋がらない可能性が高いと述べたが、能動形の *relate A with B*という形式の受動態になっている可能性も検討する必要がある。現に、『新編英和活用大辞典』と『グランドセンチュリー英和辞典第4版』は *relate A with B*という連語形式を認めている。また、『ジーニアス英和大辞典』は *relate A with B*という形式をイギリス英語において認めている⁶。

しかし、*OALD*^{6, 7, 8, 9, 10}、*LDCE*^{1, 2, 3, 4, 5, 6}、そして *COBUILD*^{4, 5, 8, 9}は、他動詞 *relate*と連語をなす前置詞として *with*を認めていない。つまり、近年出版された英英辞典は *relate A with B*という形式の連語を認めていないのである（ちなみに、*relate A to B*という連語関係（以下の(9)の例に見られるような）は近年出版された英英辞典において認められている）。

- (9) The report seeks to *relate* the rise in crime to an increase in unemployment.
(*LDCE*³, s.v. *relate*)

このように、そもそも能動形の *relate A with B*という連語形式が認められないので、その受動態形式である *be related with*も認められないと言える。

4. *with*の出所元

第2節と第3節で、*be related to*と *relate A to B*は認められるが、*be related with*と *relate A with B*は認められていない連語形式であるということを見た。では、現在出版されているいくつかの英和辞典に載っている *with*は一体何なのであろうか。*be related with*と *relate A with B*における *with*はどこから来ているのであろうか。それは、*OALD*⁵以前の版の記述内容・記述方法にあると言える。

*OALD*の旧版を辿ると、次のような記述の仕方の変遷が見られる（以下に述べることは、*OALD*の見出し語 *relate*における他動詞の項目についての記載内容である）。*OALD*²は、他動詞 *relate*との連語をなす前置詞に関して何も表記していない。しかし、*OALD*²では(10a)の例が挙げられてい

るので、*OALD*²は relate A with B という連語形式を認めていると考えてい
 だろう。次に、*OALD*^{3,4}は、relate A with B の形式を表記上認め、(10a)
 と (10b) の例を実際に記載している。そして、その後の版である *OALD*⁵
 は、relate A with B を表記上は認めているが、*OALD*⁵は relate A with B を含
 んだ例文を記載していない⁷。そして、それ以降の版である *OALD*^{6,7,8,9,10}
 では、relate A with B という形式を表記上ですら認めなくなった (ちなみに
OALD^{2,3,4,5,6,7,8,9,10}は、(11a, b)に見られる relate A to B という連語形式を
 認めている)。

- (10) a. It is difficult to *relate* these results *with* any known cause. (*OALD*^{2,3})
 b. The report *relates* high wages *with* labour shortages. (*OALD*⁴)
 (11) a. It is difficult to *relate* these results *to* any known cause. (*OALD*^{2,3})
 b. The report *relates* high wages *to* labour shortages. (*OALD*⁴)

このように、*OALD*^{2,3,4,5}は relate A to B と relate A with B の両方を認めてい
 たが⁸ (上の (10a, b) と (11a, b) の例を比較参照されたい)、その後の版の
*OALD*では、記載内容が修正され、relate A to B のみを認めたと言える。

実際、ネイティブチェックを行ったところ、インフォーマント達 (イギ
 リス人男性・2人とカナダ人男性・1人)は (10a, b) の例を容認しなかった
 ((11a, b) の例は容認された)。注目すべきは、*OALD*というイギリス系の
 英英辞典に載っていた例文がイギリス人に容認されなかったということ
 である^{8,9}。

以上から、be related with ~ と relate A with B という表現における with は、
*OALD*⁵以前の版の記述を引きずっていると考えられる。また、*POD*⁵も他
 動詞 relate と繋がる前置詞として to だけでなく with を認めており、この記
 述が現在にまで影響していると言える (cf. Wood (1967), *OED*²)。

以上から本研究の結論として、be related with ~ と relate A with B は、現
 在では使用上の規範ではないと言える^{10,11}。

5. まとめ

本稿では、形容詞 related と他動詞 relate と連語をなす前置詞は to であり、

withを伴った形式は、現段階では標準語法であるかないかについては確定できないが、少なくとも使用上の規範ではないということを論じた。また、学習用英和辞典の表記の仕方としては、toのみを示す、あるいはwithの使用(選択)に関しては《まれ》と表記するのが妥当と言えるだろう。

注

1. 本論中で述べたように、本稿は、related toのような形容詞relatedと結びつく前置詞toと、relate A to Bのような他動詞relateと共に使われる前置詞toを「連語」と呼ぶが、これらは、一般には「句動詞」(phrasal verb)や「コロケーション」(collocation)と呼ばれることがある。例えば、安藤(2011)は、relate A to Bのような形式を「句動詞」と認め(cf. Huddleston and Pullum (2002: 274))、またOCD²は、related toのような形容詞と繋がる前置詞toを「コロケーション」として認めている。

しかし、安藤(2011)は、related toのような過去分詞形容詞+前置詞の語群を「句動詞」とは見えておらず、OCD²はrelate A to Bの形式を「コロケーション」としていない。また、「イディオム」(idiom)という呼び方もあるが、「イディオム」というと、kick the bucketのように、表現が凍結化され、形容詞の修飾語句や副詞の修飾語句による修飾を受けず、また受動化も許されないものも含まれることがあるので(cf. Numberg et al. (1994), Taylor (2012))、本稿は「イディオム」という呼び方も採用しないことにした。

2. 「relatedと結びつく前置詞として表記上はtoとwithの2つを認めている」とはどういうことかという、例えば『グランドセンチュリー英和辞典第4版』において、見出し語relatedは、次のように記載されている(以下の(i)における下線は筆者)。

(i) related ㊦ ㊧関係のある、関連した(to, with . . . に)

上の下線部に見られるように、『グランドセンチュリー英和辞典第4版』は形容詞relatedと繋がる前置詞としてtoとwithの2つを表記上認めているのである。

3. どのような方法でrelatedと繋がる前置詞を確認したのかという、各辞書の見出し語でrelatedを引き、見出し語であるrelatedと繋がる前置詞を見るという方法をとった。決して、relateの他動詞用法の項目を見て、他動詞relateの受動態形式がどの前置詞と繋がっているのかを確認するという方法ではない。

ただ、OALD²については、そもそも見出し語としてrelatedが載っていない。しかし、OALD²には、be related to ~という連語形式が記載され、be related with ~という形式は記載されていないので、OALD²においてもrelatedと繋がる前置詞はtoのみであると言える。それゆえ、本稿は、OALD²におい

でも related と繋がる前置詞として to は認められ、with は認められないとした。

4. インフォーマント 4 人 (イギリス人男性・1 人, アメリカ人男性・2 人, カナダ人男性・1 人) に例文 (1') - (3'), 及び (4) と (6) を提示したところ, 4 人全員が容認しないという結果であった。

インフォーマントチェックについて, 匿名査読委員から, 本研究においてはインフォーマントの出身地や性別だけでなく, 年齢も影響する可能性があるというコメントをいただいた。筆者としてもこのコメントに対して答えたところではあるが, ただ, そうなると, 若年齢層から高齢層まで幅広い年齢層のインフォーマント調査を行わなければならない, インフォーマントの人数も 3~4 人をはるかに上回るものとなり, これほどの規模のインフォーマント調査を行うことは現時点での筆者の力では不可能である。ですので, 本研究とインフォーマントの年齢層との関連については今後の研究課題とさせていただく。

5. 安藤 (2011) には英文校閲者がついているが (実際名前も挙がっている), 例文の容認度判断にインフォーマントの意見が反映されなかった可能性がある (これはインフォーマントに責任のないことかもしれないが)。
6. 『ジーニアス英和大辞典』(見出し語 relate における他動詞の項目) には, 実際に以下の (i) のような記載の仕方がなされている (以下の (i) における下線は筆者)。

(i) relate - 働 ④ 1 [SVO₁ (to [《英》with] O₂)] <人が> (O₂ <人・物・事> と) O₁ <人・物・事> を関係づける

7. 実際, OALD² における他動詞 relate の項目は, 以下の (i) のように記載されている (以下の (i) における下線は筆者)。

(i) relate v 1 ~ sth (to/with sth) to establish a connection between eg ideas, events or situations; to link or associate sth with sth else

8. 安藤 (2011) では, (10a) と同じ例が挙げられている (安藤 (2011) で挙げられている以下の (i) の出所元は OALD^{2,3} であると考えられる)。しかし, 本論中で述べたように, 私の行ったネイティブチェックによると, この (i) の例は容認されない。

(i) It is difficult to relate these results with any known cause. (= (10a))

(安藤 2011: 1351)

注 5 でも述べたが, 安藤 (2011) には英文校閲者がついているが, 例文の容認度判断にインフォーマントの意見が反映されなかった可能性があると言える。

9. 匿名査読委員から, カナダ英語は発音はイギリス英語寄り, 文法はアメリカ英語寄りであるというコメントをいただいた。しかし, カナダ英語がイギリス英語寄りであっても, アメリカ英語寄りであっても, be related to/with ~ という連語形式の容認度に対して影響はないと言える。実際, イギリス系の英

英辞典である *OALD*, *LDCE*, *COBUILD*, *CALD* においても, アメリカ系の英英辞典である *MWALED* においても, 近年出版されたものは, *be related to* を認めているが, *be related with* は認めていない。

10. 本論中ですでに述べたように *related with* を COCA で検索したところ, 303 件あり (ちなみに, *related to* の件数は 49887 件), *related with* という形式は現代英語において不可であると言っているのではない。*be related with* ~ という連語形式が不可であるのか, あるいは, 不可でないにしても現代英語において標準語法ではないとするのかについては今後の研究課題としたい。

ただ, 現代英語において, 形容詞 *related* と慣用的に連結する前置詞は *with* よりも *to* の方が優勢であるのは事実で (*related with* は廃れつつある傾向にあると言える), このことには *relevant to* が関与していると思われる (*relevant to* は *related to* と同じく「関係・関連」を表す表現である)。少なくとも, *relevant to* の影響を無視することはできないと言える。

11. 自動詞 *relate* と連語を成す前置詞についても事情は似たようなものである。簡単に述べると, *OALD* と *LDCE* の初期の頃の版では, 自動詞 *relate* と連語を形成する前置詞として *to* と *with* の両方を認めるものがあったが (*OALD*³ と *LDCE*¹ など), *OALD*^{4, 5, 6, 7, 8, 9, 10} と *LDCE*^{3, 4, 5, 6} では, *to* のみを認めている (以下の (i) を参照)。

(i) Does the new law *relate only to* theft? (*OALD*⁵, s.v. *relate*)

このように, *relate with* という連語ももはや使用上の規範ではないと言える。

参考文献

- 安藤貞雄 (2011) 『三省堂英語イディオム・句動詞大辞典』東京: 三省堂。
Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
Numberg, Geoffrey, Ivan Sag, and Thomas Wasow (1994) “Idioms.” *Language* 70, 491-538.
Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. Oxford: Oxford University Press.
Wood, Frederick T. (1967) *English Prepositional Idioms*. London: Macmillan Press.

辞書 ([]は略称)

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 2008³, 2013⁴. Cambridge: Cambridge University Press. [*CALD*^{3, 4}]
Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary. 2003⁴, 2006⁵, 2014⁸, 2018⁹. Glasgow: HarperCollins. [*COBUILD*^{4, 5, 8, 9}]
Longman Dictionary of Contemporary English. 1978¹, 1987², 1995³, 2003⁴, 2009⁵, 2014⁶. Essex: Pearson Education. [*LDCE*^{1, 2, 3, 4, 5, 6}]

Macmillan Dictionary. Macmillan Education. Retrieved October 3, 2022. from <https://www.macmillandictionary.com/>

Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary. 2008¹, 2017², Springfield, Mass: Merriam-Webster. [MWALD^{1,2}]

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 1963², 1974³, 1989⁴, 1995⁵, 2000⁶, 2005⁷, 2010⁸, 2015⁹, 2020¹⁰. Oxford: Oxford University Press. [OALD^{2,3,4,5,6,7,8,9,10}]

Oxford Collocations Dictionary for Students of English. 2009². Oxford: Oxford University Press. [OCD²]

Oxford English Dictionary. 1989². Oxford: Clarendon Press. [OED²]

The Pocket Oxford Dictionary of Current English. 1969⁵. Oxford: Clarendon Press. [POD⁵]

『ウイズダム英和辞典』第4版. 2019. 東京: 三省堂.

『グランドセンチュリー英和辞典』第4版. 2017. 東京: 三省堂.

『研究社新英和中辞典』第7版. 2003. 東京: 研究社.

『ジーニアス英和大辞典』2001. 東京: 大修館.

『ジーニアス英和辞典』第5版. 2014. 東京: 大修館.

『新編英和活用大辞典』1995. 東京: 研究社.

『ランダムハウス英和大辞典』第2版. 1993. 東京: 小学館.

コーパス ([]は略称)

The Corpus of Contemporary American English [COCA]

(千葉工業大学非常勤)

englishlangmori@gmail.com